

放送番組センターレポート

BROADCAST PROGRAMMING CENTER OF JAPAN Report

公益財団法人 放送番組センター

〒231-0021 横浜市中区日本大通 11 横浜情報文化センター
TEL.045-222-2881 FAX.045-641-2110 <https://www.bpcj.or.jp/>

番組アーカイブの意義と未来への活用2020 ～“戦後75年”広島、長崎、沖縄からの報告～

11月21日、上智大学メディア・ジャーナリズム研究所との共催で、セミナー『番組アーカイブの意義と未来への活用2020～“戦後75年”広島、長崎、沖縄からの報告～』をオンラインで開催した。今年は、当該地の番組制作者とアーカイブ研究者が、戦争の記憶や記録を伝える番組作りへの思いや、映像アーカイブの意義などを語った。



【登壇者】

友定真治 (中国放送 報道制作局
報道制作センター 部次長)

佐藤有華 (テレビ長崎
報道制作局報道部 記者)

山里孫存 (沖縄テレビ放送
報道制作局 局次長)

丹羽美之 (東京大学 大学院
情報学環 准教授)

【司会】音 好宏 (上智大学 文学部 教授)

り様や、今後の利活用の方法を問うパネルディスカッションを行った。



■制作現場の報告と研究発表

友定氏は、1998年に中国放送に入社後、報道センターに記者として配属され、2005年の国連本部での核拡散防止条約再検討会議、2006～07年の原爆症認定訴訟取材し、ニュースデスク、統括編集長を経て現職に就任した。被爆関連番組の制作について、「被爆者の高齢化に伴い、直接話を聞くことが難しくなっている。当時幼かった方は記憶が鮮明でない部分もあり、現在は遺品や遺族の証言などから企画するのがスタンダードになってきている」と取材の現状を話した。2020年8月6日は、半世紀以上も

継続取材している原爆小頭症のドキュメンタリーや、戦後の写真をAI技術でカラー化するプロジェクトの特集などを放送した。友定氏は「継続したテーマを追い続けてきたことで、映像や音声も豊富に揃っている。若手記者が昔の証言や取り組みに触れることが、記録や記憶の継承に繋がる。また、過去の膨大な番組を新しい形で活用すること、例えば白黒の番組をカラー化するなど、あまり取材に出られなかった今年だからこそ今後のヒントを得ることができた」と語った。

長崎からリモートで参加した佐藤氏は、2015年にテレビ長崎に入社し、報道部記者として2018年から特番のディレクターを務めた。2019年には38年ぶりに来日したローマ教皇と被爆75年を迎えるナガサキをテーマに、キリスト教の信仰が深い「浦上」にスポットを当てた番組を制作した。「75年前の被害の大きさを伝えるには、どのような資料や映像を使えば良いか正解が分からず苦心した。社内の



2017年度より毎年開催している本セミナーでは、放送ライブラリーの公開番組を授業で利用した大学教員や公共施設の担当者が事例報告を行ってきたが、本年は「戦後75年」をテーマとし、第1部では登壇者が制作した番組の紹介や各社の取り組みの報告およびアーカイブ研究に関する発表を行い、第2部では映像アーカイブの有



資料映像や資料館の記録資料も活用した」と振り返った。また「8月9日を伝えるにあたり、伝え手と受け手の間で思い描くものが共通ではないことを、制作者が認識することが必要。被爆者なき時代に向け、これが最後かもしれないと思いながら被爆者の話を伺っている。ご遺族の話を引き継ぐことの積み重ねが、映像の価値になると感じている。撮影した映像を正しい情報と紐づけ、後に繋ぐことが大切な役割だと思う」と続けた。



山里氏は、1989年に沖縄テレビに入社し、バラエティー、音楽、情報番組の企画・演出を手がけた。報道部への異動を機に沖縄戦に関する取材を開始し、数々のドキュメンタリーで多数の賞を受賞。近年は映画のプロデューサーも務めている。同社が制作してきた沖縄戦関連番組は、社に残っている映像のほか、アメリカの公文書館にある「沖縄戦記録フィルム」と呼ばれる膨大な映像を活用している。沖縄戦の映像について、「戦後60年の2005年に、ドキュメンタリー作家の上原正稔さんと、どこで撮影され、誰が映っているのかといった細かい検証を行った。そのメタデータのおかげで現在はしっかり活用できている」と話した。

2020年2月に全国放送した、通称「サンマ裁判」をテーマにしたドキュメンタリー『民教協スペシャル サンマ デモクラシー』は、落語家の語り

でストーリーを展開させ、当時の映像や写真を合成するなどエンターテインメント性のある演出がなされている。山里氏は「アーカイブ映像を使って新たな伝え方にチャレンジし、今の視聴者にどうすればうまく伝わるか、あの手この手でやっている」と語った。

丹羽准教授は、メディア研究、ジャーナリズム研究、ポピュラー文化研究が専門。『日本のテレビ・ドキュメンタリー』『NNNドキュメント・クロニクル』など、番組アーカイブを活用した研究に取り組んでいる。



テレビ放送が始まって60年以上経過し、放送局には膨大な映像が残っている。その活かし方について、自身が携わった『NNNドキュメント』のアーカイブ研究の例から「制作者は新しい伝え方について苦心しているが、自らが作ってきた番組を掘り起こすと多くの可能性が見えてくる」また、長崎のケーブルテレビの活動を例に「アーカイブを単なる資料映像として使うのではなく、地域の記憶を市民と共に掘り起こし、協力しながら作り上げていく方法もある」と話した。

■パネルディスカッション

第2部では第1部の発表を踏まえたディスカッションを行った。

友定氏は「“広島を伝える”というDNAは局内の若手に受け継がれているが、何かに取り組もうとする時、今のトレンドをどう捉えるかが非常に難しい。大きなテーマをどのように継承していくか、若いディレクターたちが悩みながら挑んでいる」と語った。

山里氏は「過去の沖縄で起きたことを検証していくと、今に繋がることが多いが、記者は『知らない』というこ

とを隠したがる。再来年は本土復帰50年だが、『復帰を知る』というシリーズを作った時は、若手記者に『何も知らないので教えてください』というスタンスの取材を繰り返させた。その結果、非常に良いシリーズができた」と振り返ると、佐藤氏が「私も38年前のローマ教皇来日時は生まれていなかったで、当時取材した先輩に映像の内容や使い方に間違いがないか確認し、専門の研究者や取材相手にも相談に乗ってもらった。10年後、20年後の記者が、自分が携わった番組を誤って使うことがないように気を付けた」と続けた。



丹羽准教授は「アーカイブをどう活かすかは制作者の腕の見せどころ。過去の番組に向き合い、今の状況を照らし出すためにどう使えるか考えることや、『私たちは知らない』というところからスタートし、過去の番組から学んだり、そこから何かを発見していく姿勢が大事である」と語った。

最後に、音教授が「映像アーカイブが私たちの文化にとって非常に重要であることを認識し、その活動を続けていく意義を共有することで、次の文化創造に繋がっていく」と締めくくった。



※本セミナーはオンラインで実施した。飛沫飛散防止として登壇者間は十分な距離を保持の上、透明のアクリルパネルを設置した。また、スタッフは検温および消毒の上、収録を行った。

■2020秋の人気番組展



10月16日～12月6日、地上8局・BS8局の協力を得て、恒例の「秋の人気番組展」を開催した。新型コロナウイルス感染拡大により今春の「春の人気番組展」は中止となったため、一年ぶりの開催となった。新番組の開始時期が例年と異なることなどによる影響が予想されたが、各局の協力により、ほぼ昨年と同規模の展示を行うことができた。会場では、消毒液の設置や、展示物を極力ケース内で展示するなど、感染防止策を講じた。

各局のブースでは、NHK『エール』やフジテレビ『監察医 朝顔』『ルパンの娘』などのデザイン画、テレビ朝日

『24 JAPAN』やTBS『この恋あなたのためですか』のセット模型の展示で、新ドラマのセットを紹介した。また、日本テレビ『I Love みんなのどうぶつ園』のトレーラーのデザイン画や、テレビ神奈川『猫のひたいほどワイド』のサイン入りグッズにも注目が集まった。テレビ東京ブースでは、『デカ盛りハンター』に登場したラーメンのオブジェを展示。“ハンター”が実際に食べた量の山盛りのラーメン丼が飾られた。アンケートには「興味が湧く番組があったので、テレビで見たいと思う」等の声が寄せられた。



■脚本展示

2019年4月より、日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアムの協力を得て、展示ホール内で脚本の展示を行っている。企画展に連動した内容や、時期に沿ったテーマに合わせて20冊ほどを選定し、これまでに以下のテーマで展示を行った。

◇2019年4-6月 『学園ドラマ』

◇2019年7-9月

『平成の懐かしいテレビ番組』

◇2019年10-12月

『職業ドラマ・お仕事ドラマ』

◇2020年1-3月

『懐かしのテレビアニメ』

◇2020年7-9月 『医療ドラマ』

◇2020年10-12月 『食欲の秋！』

～おいしい「食」の脚本展～

展示脚本の中には、監督の手でカメラ位置や役者の立ち位置が細かく書き込まれたものや、見開き2ページ以上にのぼる長台詞などもあり、来館者の興味を引いている。

■令和2年度番組保存委員会

【第1回臨時番組保存委員会】

9月24日、第1回臨時番組保存委員会を書面にて開催した。議題は「大学等教育機関における在宅授業での公開番組の利用について」で、概要は以下の通り。

新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、首都圏を中心とした大学の授業の多くが在宅授業となった現状を踏まえ、本年度よりセンターが動画配信サービスを使用し、クラウド上に番組を格納してストリーミング送信し、大学等教育機関（専門学校、中学・高等学校を含む）の在宅授業に対応することについて了承した。実施の条件は、①個々の授業に対応するための期間限定の送信であること ②対象は放送ライブラリーの公開番組であること ③教育機関から要望があった場合、利用希望番組の使用可否は、当該局が決めることができること ④教育利用にあたり、必要となる番組中の著作権、肖像権等の処理

は、センターがその責任と負担において処理することとする。

なお、今回の対応は、コロナウイルス感染拡大の状況を踏まえた措置とし、試験運用の形で開始する。

【第2回番組保存委員会】

11月25日、第2回番組保存委員会をオンライン形式で開催した。概要は以下の通り。

<審議事項>

◇令和2年度保存対象番組の選定

テレビ番組は、保存対象番組として選定した平成30年度放送の1,045本、また、過去に遡って収集する番組41本（平成13年度から17年度の民放連賞と放送文化基金賞の受賞番組37本、大学等から要望のあった「公共的な利用ニーズのある番組」4本）、および昭和45年度制作の協賛番組82本について提供依頼を行うこと、ラジオ番組は令和元年度、2年度に放送されたNHK、民放各社63社の合計201本に加え、11月以降に発表される受賞番組約200

本を追加して、提供を要請していくことを承認した。

<報告事項>

◇公開番組のリスク管理について

令和元年度第1回番組保存委員会で承認された放送事業者への連絡と対応について、令和元年11月以降の実施状況の報告があり、了承した。

◇全国展開事業の関連事項について

以下の3件の報告があり、了承した。

①大学等教育機関における「在宅授業」での公開番組の利用状況

②サテライト・ライブラリーおよび大学等教育機関での利用状況

③上智大学共催セミナーについて

◇その他

以下の2件の報告があり、了承した。

①デジタルアーカイブジャパンの動向 / ジャパンサーチの正式版公開と当センターの連携状況について。

②番組視聴システムの更新 / 本年度末に完了予定のシステム更新作業の進捗状況について。

■教育機関での番組利活用

◇通常授業での番組視聴

【東京工芸大学】

令和2年度後期、芸術学部「放送史Ⅱ」（丁智恵助教）の対面授業で、『巨泉前武ゲバゲバ60分!』（1971/日本テレビ）、『連続テレビ小説 おしん』（1983/NHK）、『NNNドキュメント '87 母さんが死んだ 生活保護の周辺』（1987/札幌テレビ）、『日本人の源流シリーズ [2] ヒマラヤ天空の秘境 ラダック』（1993/テレビ東京）などが利用されている。

【大阪教育大学大学院】

令和2年度後期、教育学研究科国際文化コース「日本近代言語文化論Ⅲ」（櫛引祐希子准教授）の対面授業で、『ETV8 外国人による日本語弁論大会 第27回 [1] [2] ワタシの見たニッポン』（1986/NHK）が利用されている。

【熊本学園大学】

前期に引き続き、令和2年度後期、全学教育「情報メディア論Ⅱ」（村上雅通非常勤講師）の対面授業で、熊本

放送制作のドキュメンタリー『封印～脱走者たちの終戦～』（1996）、『市民たちの水俣病』（1997）、『流転 追放の高麗人と日本のメロディー』（2004）などが利用されている。

◇在宅授業に対応した番組視聴

オンライン授業が増加している大学等からの要望に応えるため、在宅で授業を受ける学生の番組視聴対応のための試験運用を、10月から開始した。

【早稲田大学】

令和2年度後期、文化構想学部文芸・ジャーナリズム論系「日本近代文学とマスメディア2」（鳥羽耕史教授）の授業で、ラジオドラマ『放送劇 パイロット・ファーム』（1956/NHK）、『放送劇 地底』（1960/NHK）、『詩劇 飛翔』（1966/TBS ラジオ）、『ラジオのための交響詩譜 湧然の柵』（1975/文化放送）などが利用されている。

【立教大学】

令和2年度後期、社会学部メディア社会学科「映像メディア論」（石井彰非常勤講師）の授業で、『原発のまち

に生まれて～誘致50年 福井の苦悩～』（2012/福井テレビ）、『17歳の先生～子どもの貧困を越えて～』（2016/北海道文化放送）、『ザ・ドキュメント 山奥ニート』（2016/関西テレビ）、『映像 '17 沖縄 さまよう木霊 基地反対運動の素顔』（2017/毎日放送）などが利用されている。

◇中学、高校での番組利活用

教育機関での利活用拡大を目指し、中学、高校での番組利用形態検証のための試験運用を開始した。

【浦和学院高等学校】

令和2年度11月から、「現代文」の授業で、教科書に掲載されている夏目漱石著「こころ」が原作の『日本名作ドラマ こころ』（1994/カズモ、テレビ東京）が利用されている。

■サテライト・ライブラリーの運用

令和2年度は新たに4施設（計12施設）での利用を予定。新型コロナウイルスの影響による施設の休館や端末利用休止の対応を見つつ運用している。

■2020.10～2020.11の新公開番組

【テレビ番組】

『HTB ノンフィクション カミイの鳥の軌跡 ～オオジシギ 2つの物語～』

2017.08.14/北海道テレビ放送

『日曜劇場 天皇の料理番 [1]～[6]』

2015.04.26～05.31/TBS テレビ

『文筆系トークバラエティ

ご本、出しときますね? [1]』

2016.04.08/BS テレビ東京

『小学生アフリカへ行く』

2006.04.29/新潟テレビ 21

『流転 追放の高麗人と日本のメロディー』

2004.11.08/熊本放送

【ラジオ番組】

『ラジオライトハウススペシャル

成子と忠男 盲ろう児教育のあけぼの』

2019.05.26/山梨放送

『私宅監置・沖縄 ～扉がひらくとき～』

2018.05.28/ラジオ沖縄

など、テレビ95本、ラジオ25本。

新公開番組 PICK UP!

NNNドキュメント '18
ママ もう泣かんといてな
～12歳 全盲ドラマーが奏でる
'音の世界'～

2018.12.24 / 読売テレビ放送

ディレクター：安部祐真

チーフプロデューサー：堀川雅子

幼くして両目を失うという厳しい現実に向かいながらも、持ち前の明るい性格、そして音楽との出会いによって力強く生きる少年とその家族を追ったドキュメンタリーである。

大阪に住む酒井響希君は、2歳の時に小児がんのため両目を摘出、光を失った。当初は昼も夜も、何を口にしていいのかも分からない状態だったという。そんな悲しみの淵にあった響希君と家族を救ったのは「音」、そしてドラムとの出会いだった。

音で世界を捉えようと、たまたま手にした鉄製のマドラで家中を叩き続ける響希君を見た両親は、息子の興味を育てようと電子ドラムを与え、応援した。

ドラムに熱中する響希君に、人気音楽ユニット「Def Tech」との出会いが大きな目標を抱かせた。いつか共演することを夢見て、プロの指導を仰ぐなどドラマに励み続けた4年後、ついにその夢が現実のものとなる。夢叶った響希君がステージの上から叫んだのは、母親への感謝と「ママ もう泣かんといてな」という優しい言葉だった。

夢を実現させた響希君だったが、早くも新しい目標に向かって歩み始めている。障害の有無に関わらず、ひたむきに前へ進もうとする少年の姿が、見る者に勇気と希望を与えてくれる。

◆放送ライブラリー公開番組数

テレビ番組 17,517本 / ラジオ番組 4,659本 / テレビ・ラジオ CM 11,666本 / 劇場用ニュース映画 2,683項目 (2020.11.30 現在)